

子育て支援の現場から・・・

子どもの友だち関係に悩む母親たち

吉川はる奈

はじめに

「エンゼルプラン」に続く「新エンゼルプラン」が提起され、子育て支援の必要性がますます問われるようになった。地域資源として、保育園や幼稚園を中心とする保育の場の

活用も叫ばれ、家族とそれを取りまく多くの地域資源が連携し合いながら、子育てを支援していくという発想ははやめずらしいことではなくなった。

システムこそ自治体によって違いがあるが、少なくとも、現在子育て支援策は、すべ

ての自治体が取り組むべき課題となっていることは間違いないだろう。しかし母親たちの子育てをめぐる悩みはつきない。

本稿では、筆者が保健センターの心理相談や育児教室、保育園・幼稚園での巡回相談や育児支援事業、また子育てグループの立ち上げに参加する中で対応してきた、子育てをめぐる最近の母親・家族の悩みのあり様についてふれながら、支援のありかたについて考えてみたい。

保健センターでの育児教室から

母親のもつ育児不安を軽減しようと、地域の保健センターでは母子保健事業の中で、育児教室や子育て学習室が年間を通して開催されている。内容はさまざまで離乳食や小児の病気に関するものから絵本とのふれあいや遊

び、心身発達についてなど、また平日の母親むけのものから土曜日に開催する父親むけのものまであり、担当者の試行錯誤は現在も続いている。

育児教室は自治体の広報紙に掲載されるが、ほとんど発行当日の数時間のうちに定員が埋まるという状況である。三歳未満児をもつ母親対象の育児教室が多く、形式は子どもを抱っこして参加したり、部屋に設けられた保育コーナーで保健婦や保育ボランティアに子どもと遊んでもらいながら参加するという



ものである。

講演者による一方的な講演形式ではなく、受講者参加型が好評である。実は母親自身の不安を話したくて参加する場合が多い。育児教室の進行過程で出きる限り母自身が語る時間を確保することが大切になる。一方で、講演者に個人的に育児上の相談をしたい母親もいる。したがって講演中の質疑の時間ではなく、終了後の自由質疑に列ができる。

育児教室の外枠を説明したが、中身についてふれた。母親の悩みで目立つのは、「子どもが友だちとうまく遊べない」という悩みである。とはいえ、子どもの年齢が三歳未満という「うまく遊べない」のは自然な姿である。傍から見ると自然な姿でも、母親自身の負担感は強い。

具体的に悩みをきいていくと、母親からは

「公園でおもちゃをとった」「友だちをたたいた」「中に入らず友だちのまわりをうろろしている」から「いつも自分の物をとられてしまう」「ゆずってしまおう」といった子どもたちが自分なりに人間関係を結ぼうとぶつかりあっている姿がうかぶエピソードが語られる。「この時期はそれでいいんだよ。でも毎日だと他のお母さんにも気をつかうものね」というひと言で表情を明るくする母親も多い。「取る」側も「取られる」側も悩むのだから、どの母親も悩んでいるということでもあるのだろうか。

幼稚園の育児支援事業から

幼稚園も保育園とともに地域資源として、家族を支援する機関としての役割を期待されている。具体的に未就園者を対象に園庭を開

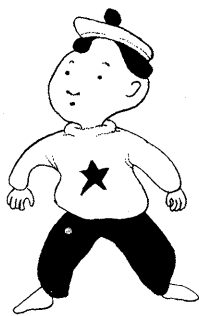


放したり、幼児グループを開催したり、育児相談をおこなったりしている。同時に、在園中の子どものもつ育児上の悩みや不安も受け止め、相談を行っている。

その中で、最近在園中の子どものもつ母親たちからこんな相談が目立つ。「いじめっ子やいじめられっ子にならないか、心配です」というものである。具体的に目の前の子ども姿のこんなところが心配というのではなく、将来に対する心配である。昨今の子どもを巡る事件、社会問題が検討される中で、人間関係の希薄さや結ばなさや狭さが指摘され、人間関係を結ぶ力、対人関係の力を育てることの重要性があちこちで強調されている。「いじめっ子やいじめられっ子」になると人間関係が結ばなくなり対人関係の力も育てられなくなるだろうから心配だという。

実は、保健センターの育児教室でかけられる母親たちの悩み「子どもが友だちとうまく遊べない」と同様、対人関係の育ちへの不安であることに驚く。

母親たちは、子どもの対人関係、友だちとの関係にとっても敏感である。「友だちとの関係を育てなければ」という意識が強い。従って「仲良く」友だち関係を結ぶというところにこだわりがちである。そんな母親たち自身もまた、人間関係に過敏であることがとても多い。子どもの友だち関係の悩みとしての相



談が、母親自身の人間関係の悩みと大きく関わっている場合もある。

*

幼稚園でも保健センターでも、子どもの年齢は異なっても同じように対人関係の育ちに関する不安が強いということは、支援を行う立場としてどのようなことに留意したらよいのであろうか。三歳未満児対象の育児教室で不安が解消されていないからと考えるべきなのだろうか。

というよりも、育児に関する不安は恒常的に生じていると考えるべきではないだろうか。特に対人関係という悩みは、個の活動でのみおこるのではない、家族から集団へと場が広がるとより多く出会う、生涯を通しておこりうる悩みであるのだろうか。

地域資源の場として、保健センターや幼稚園、そのほか保育園や教育センターや育児支援センターなど、多くの機関が連携して支援していくことの必要性が指摘されている。

それは、このような母親たちの恒常的な悩みに関しては、場合によっては複数機関で継続的に支援したり、また相談員による母親を対象とする相談とともに保育者を通して子どもに働きかけ、間接的に母親を支援すること、コンサルテーションをも取り入れながら柔軟にすすめていくことが必要とされるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)